手　記

新潟県中越地震から１年

新潟アンギオ画像研究会　折笠　康宏（おりがさ　やすひろ）
（厚生連三条総合病院・長岡市在住）

早いもので先月の 10 月 23 日で、あの悲惨だった新潟中越地震から１年がたちました。まずは全国の皆様方のあたたかいご支援に感謝申し上げます。本当に有難うございました。

今年のあの忌まわしい 10 月 23 日は日曜日ということもあって、被災地はもちろん新潟県内各地で復興の祈年祭や追悼式典などが行われました。長岡市在住の私も子供の学校文化祭で餅つきの手伝いなどで大忙しでした。復興文化祭には子供たちだけではなく、大勢の父兄をはじめ地域の方々がたくさん集まりました。そして当時の恐ろしさや苦労話、そしてここまで来た復興の喜びを口々にし、本当にうれしそうな顔ばかりでした。しかし校長先生のあいさつでは涙する場面もあり会場中がすすり泣きやもらい泣きをするという一場面もありました。その場を見たとき、住民の皆さんが本当につらい日々を思い出し、苦労に苦労を重ねながら１年をかけてようやく立ち直ってきたのだなあとつくづく思いました。

市も町もそして村でも１年でみるみる元気をとりもどしたようです。全壊した家屋は新築されたり、壊れかけた建物は修復あるいは建て直されたりしています。道路もあちこちで工事が行われどんどん平坦できれいになりました。もうすぐ冬ということもあって公共の工事は現在も急ピッチで進んでいます。道路工事箇所があまりに多くて通勤・通学にちょっと困りますが・・・。

被災当日のテレビ（ラジオも）では各局とも特番を組み、震災当時の様子や１年間の復興にかける努力や苦労話などを報道していました。それを見ていて、被災直後を思い浮かべますとたった１年間でよくここまで復興したなあ、頑張ったなあと思います。しかしその反面、被害の大きかった地域はまだまだこれからも大変な日々が続いていくことがよくわかりました。同じ震災地でも地域によって大きな差があり、いまだ家屋破壊や危険地帯のため、また道路が整備されないため住居地に帰ることができない方々がまだまだ沢山おられ、不便な仮設住宅の生活を余儀なくされています。誰しも自分のところがよくなると震災の記憶もうすれていくものですが、まだまだ自分たちでやらなければならないことは多々あるのだろうと思いました。それと同時に、テレビを見ていて当時を振り返りながら一つ気が付いたことがあります。それは私が震災当時、医療に携わる者として何をやれたのだろうかということです。結論は何もやれなかった、それよりもできなかった、しなかったということです。報道番組の中では大勢のボランティアの方々や地元住民の方々が必死に救済の手を差し伸べ手伝いをしていました。私はというと、残念ですが当時は自分のことで手一杯で地元の系列病院にも手伝いにいくこともできませんでした。今この時期になってそれが悔やまれて仕方がありません。これからは医療人として社会に少しでも貢献できる人間になれたら、いや絶対に成長したいと思います。日頃から病院等における緊急時の対策を講じておくことも非常に大切なことですが、いざその直面に出会ったときに一個人として何をすべきかということを常日頃から考えておくことの大切さも大いに学びました。

１年経った今なお約 9,000 人もの人達が仮設住宅で不自由な生活を送っています。また厳しい冬の足音も聞こえてきます、豪雪地である当地では雪との戦いもあります。我々の復興はまだまだ続いていきます。これからも引き続きご支援をよろしくお願い申し上げます。

皆様、１年間本当にあたたかいご支援を感謝します、ありがとうございました。